

家 岸 遺 跡

農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 古 窯 址 調 査 —

1998

長野県上水内郡牟礼村教育委員会

家岸道跡 正誤表

頁	4	6	6
行	第 2 圖	24	25
誤	平井富世家	小山文夫氏	学芸委員
正	平井富善家	小山丈夫氏	学芸員

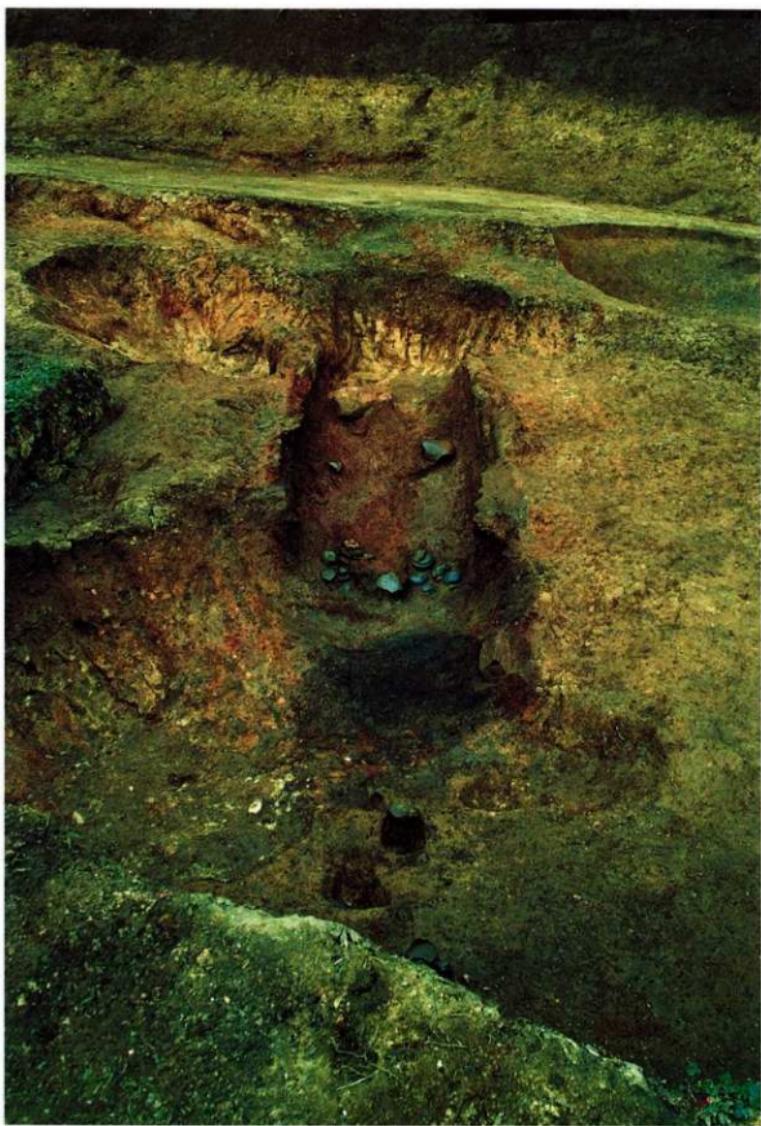
家 岸 遺 跡

農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 古 窯 址 調 査 —

1998

長野県上水内郡牟礼村教育委員会



家岸窯址（1号窯）

序

農道改良工事整備事業にともない、本村平出地籍にある「家岸（やぎし）遺跡」の発掘を実施することになりました。埋蔵されている文化財の破損を防止するため、記録・保存を緊急に行う必要に迫られて参りました。家岸地区は平出地籍北側の高台で南斜面となっており、以前より土器の破片が数多く見つかっていました。今回の発掘調査は20日ほどの短期間に集中して行われましたが、窯址1基が見つかり、須恵器（平安時代の土器）が多数出土しました。この地籍は土器に適した良質の上があり、近くに遺跡が多く散在しています。古くからの住民の生活が記録されています。これらのことと含めて、点が線になり、面として古代の生活や文化の解明がなされることを期待致しております。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会をはじめ各関係機関、地元地権者の皆様、調査協力員各位に深く感謝を申し上げます。

この報告書を含め村内の資料が、むれ歴史ふれあい館に展示され多くの方々に活用され、お役に立つことを願っております。

平成10年3月

牟礼村教育委員会
教育長 山田 邦彦

例　　言

- 1 本書は、農村総合整備モデル事業としての農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は牛札村教育委員会が牛札村役場産業振興課の委託を受け実施した。
- 2 発掘調査の記録、得られた資料、出土した遺物は牛札村教育委員会が保管している。
- 3 家岸遺跡の略記号を「HY」とする。
- 4 遺物の整理、拓本、および図面整理、トレースは富岡鹿子、柳沢まち子が行い、遺物の実測は横山かよ子が行った。
- 5 本書の執筆・編集は主として横山かよ子が行ったが、第2章は矢野恒雄が、第3章第3節は小柳義男が執筆した。
- 6 遺構の測量は御写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1:20の縮尺で基本図を作成し、本書では1:40にしてある。
- 7 遺物実測図、土器拓影の縮尺は基本的に1:3にしてあり、異なるものもあるが各々縮尺を示してある。
- 8 遺物実測図、遺物観察表、写真図版の番号は一致する。
- 9 本調査にあたり、笹沢浩・小柳義男・平井太一・平井隆二の各氏にご指導とご協力をいただいた。心から感謝申し上げる。

目 次

口 統	
序	
例 言	
日 次	
第1章 調査経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の体制.....	1
第2章 家岸遺跡の地理的歴史的環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	2
第3章 調 査.....	9
第1節 調査の概要.....	9
第2節 遺構と遺物.....	10
第3節 成部に爪形压痕をもつ須恵器.....	17
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

第1図 IH山神代小字図.....	2
第2図 IH山神代地区図.....	4
第3図 家岸遺跡遺構全体図.....	9
第4図 家岸遺跡地形図.....	11
第5図 家岸遺跡周辺の古窯址分布図.....	12
第6図 1号窯実測図.....	13
第7図 SK1尖削図.....	16
第8~12図 1号窯出土遺物実測図.....	23~27
第13図 SK1出土遺物実測図.....	27
第14~15図 タタキ目と当て具拓影図.....	28~29

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

平成9年度に農村総合整備モデル事業農道65号建設工事を実施することになった。工事予定地周辺には須恵器生産の窯址が多く分布していること、また土地所有者のひとりでもある平井太一氏から以前より教育委員会へ遺跡かどうかの照会があった場所が工事範囲に当たることから、確認の必要があり、事業の担当課である産業振興課と協議をおこなった。平成8年12月、工事予定地の試掘調査を行い、窯跡を確認した。産業振興課との再度の保護協議を経て、平成9年6月25日～7月18日までの本調査実施に至った。

第2節 調査の体制

調査主体者	牛乳村教育委員会 教育長 山田邦彦				
事務局	総務教育課	課長	余井元司		
	"		栄部史子		
調査担当者	"		横山かよ子		
調査協力者	伊藤利男	神谷浦太郎	久保田哲子	高野芳美	高野きくよ
	外谷ふみ子	富岡鹿子	中沢絢子	二本松久美子	柳沢まち子
				守島尊夫	

第2章 家岸遺跡の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境



第1図 旧山神代小字図

平出北部の旧山神代（現平出北部の内）集落は主として大字平出北端田北側街道の東側と、北側街道から分岐する番匠集落への道沿いとの間に立地する地域である。大正12年（1923）5月5日、青野神社（南部）大穴守神社（平出本村）山神代神社の3社が合併して平出神社になる前、山神代神社（大石神社）を氏神とする自然村であった。地形的には北は宇大峯等の山地を背にし南方に開け、宇川流地区で東流する月見川に臨む傾斜地で、眼下に平出地区の大半を見下ろし磐山から磐光亦平まで遠望できる景勝の地である。

気象的には集落の北側に近い分水嶺の三木松峠を境にし、牛札盆地より冬は積雪が少なく、また北風のあたらない住みよい地区である。交通上は南方から三木松峠を越える坂的な要所で、旧北国街道端には昔から「与治右衛門坂」と呼ばれる急坂がある。その他この街道にやや平行して東側に宇平

出口、宇山道などの古い交通地名が存在する。

集落は南端の低地、宇家岸・川流の水に恵まれた月見川附近に大部分立地し、現在は29軒の純農村である。屋敷に続く水田の外は全部果樹園で、いわゆる畑作農業中心のオカドコである。

第2節 歴史的環境

1. 沿革

通称山神代は元禄3年（1690）中尾村（元和2年神代村から独立）の新田があったのが正式に中尾新田村として独立。さらに文久2年（1862）に山神代村と改名し明治に至ったものである（『農野町年表』）。以下これらの経緯を簡かに史料により述べる。

正徳5年（1715）の「中尾新田割山銘細帳中尾村」（農野郷土資料館蔵写真）には次のように書かれている。

覚

四万武千百九拾四歩 中尾新田江割後候分

此訛

七方七千九百坪 面わり分本途

残る武万四千武百 此内へ高わり分毫人二付

九拾四歩 七百五十坪ツ、外三百步

此分武道高わり 人候面惣面わりメ毫人ニ

二成中候 付千五十坪ツ、

丸山答ツ	是ハ中山
七右衛門方江参り	与 兵 衛
	市 左 衛 門
	伝 兵 衛
	三 郎 衛
	嘉 平 次
	加 右 衛 門
作之助方へ参り	吉 三 郎
	金五右衛門
	権 四 郎
斧右衛門持 火郎右衛門方へ参り	左 右 衛 門
長左衛門持	左 太 夫
	治右衛門跡
中保江参り 是より前山分	左之右衛門先
	仁 兵 衛
	金右衛門
	左 五 兵 衛
高山殿参り	弥 五 兵 衛
高山殿参り	跡 助
方へ参り	市 兵 衛
重兵衛方へ参り	二 郎 助
面わり壱人分	文 左衛門 清

此分之山他領他村江参るか又は壳引には為致不申定に御座候。若外江引越申候ハ、組中江右之山返し可申候已上

面わり人数女壱人

(以下略)

元禄3年独立して25年を経た正徳5年になんでも中尾新田割山と中尾村が唱えているのは、中尾新田村発足以前からの削山であったことを明確にしたものであり、この地はもともと中尾村の入会山であった名残りとみられ、それが逐次そこに定住する人が増え、飛び地の新田村へと発展したものと推考されるのである。

「面わり人数二十一人分」とあるは、21軒の戸数を示すものとみられる。

天保14年(1843)卯八月百姓代斧松組頭直作、名主六右衛門が中野御役所の森親之助に差し上げた書類(平井降二家藏)には、中尾新田村の總石高(延宝6年の検地帳を以取調)が次のように書かれている。

一、高百拾三石三斗

此反別拾四町七反五畝拾六步

此取米 拾武石四升八合

此賦

川高七石六斗壱升五合



第2図 旧山神代地区図

此反別六反八畝拾八歩

此取米三石七升五合

田本免 免三ツ九分五厘九毛余

中下下、メ反米四斗四升七升六合

畠高百五石六斗八升五合

此反別拾四町六畝武拾歩

此取米九石三升七合

畠本免 免八分五厘五毛

上中下下、メ反米六升四合三タ

上の總收穫高百拾三石三升に対する田高の割は7分、畠高は9割3分となる。まさにこの地は完全なオカドコである。また同書類の末尾に「天保十三寅年家数拾九軒、人数七拾五人内男三拾六人女三拾九人」とあるのをみても、農業立村として生活の厳しさがうかがわれる。

文久2年(1862)中尾新田村は中尾村に「山神代村」と村名を改称したいと申し出たので、同年10月6日中尾村は中野代官所宛次のような文書(豊野町中尾武郎家蔵)を提出した(読み下し文にする)。

恐れ乍ら書付を以て申上げ奉り候

一、当御支配所水内郡中尾新田の儀、村名替上げ候に付、先般故陣有無御尋ね御座候に付、迷惑筋ひと通り申上げ奉り候處、猶今般召出され御理解下し置かれ、これに依て得と勘考仕り候義、別郷に相成り候ても中尾新田にて罷在候故、本・新の所縁失わざる義に御座候。然るを山神代村と唱い候ては絶縁に罷り成り、神代村の新田の郷様に落入り実々不都合筋に御座候間、御質慮を以て本新の所縁失わざる

御取計い恐れ乍ら願上げ奉り候。右新田の者ども強て御願い申上げ奉り候儀に候は、拠なき次第にて御座候間、私共も出府仕り御伺い申上ぐべきと存じ奉り候。何卒此段聞召しなさる訳、右新田の者共へ御理解成し下し置かれ名間の村名替等致さざる様、仰せ聞かされ下し置かれ度く恐れ乍ら願上げ奉り候。以上

(季教)
真田信義守兼御所

文久元年戊午十月六日

水内郡中尾村 五郎右衛門印

中野

作 内印

御役所

かくして山神代村と改称されたのである。その後明治8年(1875)に至り、平出村(本村)と平出新田村と共に3か村合併して平出村となった。明治22年の町村合併で牛込村の発足(翌年中郷村)により、当地区

は大字平出となつたのである。

2.交 通

慶長16年（1611）北国街道開通以前の交通文書が、牛札神社に蔵されている。その第1は天正11年（1583）上杉景勝から出された制札である。

制札

右信州越國往復之人民経横道之事堅令停止等、所詮牛札香白坂を直に長沼へ可令往還之由、仰出被成御朱印者也、仍如件

天正十一一年

（上杉景勝）

朱印 三月日 春行中

上の中で重要なことは「牛札より香白坂を直に長沼へ往還せしむべきの由」の文言である。ここで言う牛札は牛札宿発足以前であるから、現在の牛札の町でなく矢筒城下の表町であろう。從来は牛札から香白坂（神代坂）への往還と言うだけで、その中間はどこを通過したかは余り考証されなかった。ところが今回前述の正徳5年の「中尾新田割山銘細帳」を解説する中で、その末尾に「畠上山、千七百八拾坪長沼道そへ是ハ名主山二組中相続之上仕置申候」の文言を発見した。「長沼道そへ」こそ前述の天正11年上杉景勝文書の中で「自牛札香白坂を直に長沼へ」とある長沼への道筋をさしているのであり、この地域内を通過していることがわかった。

明治25年（1892）の役場の切図を組み合わせて、山神代地区の集落を中心にして作成したのが図2である。これによると北の方字平出口より北国街道にはば平行して当集落から月見川を渡って三念沢を目指し、三念沢を下る手前で東に曲がり一里塚に達して、香白坂（神代坂）を下る長沼道がある。

慶長7年（1602）と8年の牛札神社蔵の交通文書では「信州越國往復之商人荷、從牛札白坂を直長沼…」となっており、香白坂にかわって白坂が登場する。白坂とは通称は十文字と呼ばれる場所で、番匠集落の南方豊野町との境界である分水嶺的な地形の地である。ここを通過するには前述したように月見川を渡って直ちに東南に分岐すると、いわゆる白坂の峠に達し善光寺平が一望に見える。道は急坂となって下ると神代坂道に連絡する古道筋がある。山神代の古者はこのルートを長沼道と從来個人的に呼んでいたが、これこそ北国街道開通以前、牛札盆地から長沼への古道と考えられるのである。

3.犬石神社跡

宇八ツ塚の山頂に当地の氏神社跡がある。明治4年（1871）長沼内町守田神社の佐藤神主・藤原秀美が中野県庁に届けた文書には次のように記載されている（『神社明細帳原本』明治4年社寺掛（長野県歴史館蔵））。

信濃国水内郡山神代村鎮座

- 一、大石大明持
- 一、本殿 東西九尺 南北式間
- 一、拝殿 東西四間 南北三間
- 一、鳥居 地ノ間八尺 長サ毫丈
- 一、祭神 大己貴命
- 一、神位 無御座候
- 一、祭日 九月土用五日前

- 一、社地 東西拾間 南北拾五間垣御高辻之内
- 一、社額 無御座
- 一、造営之儀ハ産子ニテ仕候式歲之儀ハ不相定
- 一、大石大明神社ヨリ中野県御守船渡迄三里半
- 一、右大石大明神ハ兼勤奉仕罷在候

長沼内町守田神社住居

明治四半歳二月 佐藤神主[◎]
中野県御守 藤原秀美 花押

このように明治4年までは大石大明神と称したのである。ところが明治14年長野県令植崎寛直への届書によれば、「祭神は大穴牟遲神と書かれ社号は、明治十二年十一月山神代神社と改称許可になった」と書かれている。大己貴命も大穴牟遲神も同一神で大国主命のことで出雲神社の系統である。大石はあまりにも土俗的で品位がないと考え村名にちなんで山神代神社としたのであろう。

大正2年(1913)大字平出内の神社合併により、山神代神社は平出神社に合併し、跡地は個人に払い下げられた。昭和15年神社跡に建立された自然石の石標には正面に「舊社地」、側面に「紀元二千六百歳建之」と刻されている。右石標の東側に接して昭和23年(1948)平井悟一・平井佳則・山崎滋助・平井久藏の4人が発起人となり、集落内から合計1206円の寄付金を集めて独立した立派な流造型石祠が安置されている。これは大正15年平出神社に合併してからちょうど50年になるのを記念したものであろう。このことは地域の人たちがハッ旗に鎮座した大石大明神の地を聖地として、昔からいかに大切に護持してきたかがうかがわれる。

4.門徒衆の人々

平井富善家の墓地(図2の③)にある古い墓石(高さ約50cm)の正面に「法名平井氏一家」、側面に「享保□年八月」の文字がかすかに読み取れる。法名は門徒宗で使う文字で、「平井氏一家」は門徒である平井氏一族の墓の意である。場所は平井一家の宅地の裏に続く傾斜地(字屋峯)で、生前の我が家を見下ろせる理想的な墓地である。同家の伝承では「昔、平山順生寺が応仁二年(1468)栃木県芳賀郡平出村から鬱山の麓に移住して来た時に、一緒にについて来てこの石塔を持って來た」とのこと。小山文夫氏(むれ歴史ふれあい館学芸委員)からこのことについて「現存するのは時代が下がるので、後になって当初の意を称して作ったものであろう」との教示を得た。

昔、平井富善家から隠居家持に出る時家の仏壇を持って出たと書われる通称与治右衛門家(現当主平井稔)がある。現在お仏壇の本尊として「紙本著色方便法身尊形」(『奉札村誌上』参照)その御裏書に「木頸寺釋一如(花押)方便法身尊形 頂主釋靜雲」の墨書きがある。一如は東本願寺16代(1619-1700)であるので、元禄年間のものと推定される。その2は紙本伝親鸞等九字名号で「南光 不可思議光如来」としたためられた小幡がある。以上、平井氏一家は現在も平山順生寺系の、鬱山證念寺の有力な檀家である。

宇川流の旧北国街道端に居住する渡辺昇家に最古の法名として次のように紙に墨書きされた古い法名が秘蔵されている。

宝永四年丁亥
法名 桂 敬念
八月廿五日
元禄七申戌年
法名 桂尼妙順
四月十五日 西巣寺空慶（花押）桂

上の法名で見るかぎり、同家は長野市長沼の浄土真宗成田山西巣寺の檀家である。また次のような法名もある。

桂尼妙春	享保十年
平出先祖	亥正月十二日
桂善	了 正徳五年
	未十月六日

平出先祖とあるので正徳5年（1715）没の善了、享保10年（1725）没の妙春2人は夫婦で、正徳5年には平出に住んでいたのである。しかし前記のように元禄7年には西巣寺檀家であったのである。現在は高山寺檀家で何時の時代から転寺したかは不明である。同家の伝承では長沼から移住して来たとある。檀家関係からしてもさもありなんと思われる。現宅地は人字平出字東浦に接し突き出ているので「ではりの家」と呼ばれている。

山崎春雄家の墓地（図2②）に「代々之墓享保十年十二月」と明瞭に読み取れる門徒型の墓塔（高さ約50cm）がある。享保10年と正確に読み取れるのは貴重なものである。同家の過去帳に大祖先の法名として「桂妙心 享保十年十二月二十五日」があり、享保10年の墓塔と全く一致する。現在同家は前者の渡辺家と共に高山寺の檀家で、名のある世話を人である。

同じ山崎系統の仁太夫（現山崎貞雄家）は文政元年（1818）に高山寺境内に、同13年には名号堂入口に石造常夜燈（いのち村の石造文化財）を寄進している。仁太夫の本業は伯業で牛馬の売買を手広くやったが、一面信仰心が厚かったのである。

松岡信雄（9代）家、初代の人は加平治と称し、法名は「桂淨玄 亨保十巴年六月八日」とある（過去帳による）。没年の享保10年は、すぐ隣家の山崎春雄家の墓塔と全く同年である。

同家の故松岡倉蔵（大正2年1月1日生）は生前「松岡家は近所の山崎・宮沢家（現在小玉に移住の宮沢達男）と共に、モモクネに近い字山道に住んでいたのが、今の場所に下りて来た」と語られた。このことは現当主には伝承されていないが、西隣に居住する山崎ち江子氏（大正9年3月20日生）は、「以前倉蔵さんから聞いたことがある」と証言されている。『長野県町村誌』の平出村の項に偶然にも「山神代村、古昔字山道に一部落をなし居住す。後年月不詳通路の便を以て今地に移住す」とある。失礼な言い方であるが倉蔵氏は、町村誌を読んで話したのではなく同家の先祖代々の伝承であったと推察するものである。字山道に居住した時代の宗派は不明である。

天保14年（1843）中尾新田村の「浄土真宗宗門人別御改帳（半井隆二家蔵）」によると寺院別の家数は、諏念寺が6、高山寺が10、長命寺が2、正法寺が1の檀家である。地元の高山寺檀家が一番多くいすれも門徒である。

5. 寺屋敷の古墓塔

山崎寿家の裏、大字豊野字平出口453番地を、通称地域の人達は寺屋敷と呼んでいる。同家はこの土地3畝13歩の原野を昭和26年渡辺芳衛家から入手したが、それ以前からこの地の一角に古い墓塔が建っていたとのこと（図2⑤）。入手後その墓塔を字山道にある共同墓地の、自家の墓地に移転した（図2⑥）。

現在「享保十五歳十一月廿四日 本齋□信女」（高さ56cm）と「享保□□十月十八日 妙道禪定尼」（高さ50cm）と解説できる墓塔2基と、小さな石仏2基ほどある。また、そのままの平井太一家の墓地にも年代不明であるが、やはり寺屋敷から移転された山崎寿家と同型の墓塔2基の中、禪定門の文字のついたのが1基ある。これらは何れも禪宗系の戒名のついた墓塔である。從って最初にあった寺屋敷の地は禪寺跡と推考されるものである。とすると享保の頃には寺屋敷の地統きには禪宗系の人家があったことは間違いない。しかし当令これを実証する手がかりは皆目ない。

6.まとめ

従来、山神代地区については明治8年新しく平出村に合併した小集落であるので、集落史の調査研究が不十分であった。今回幸いに豊野地区からも史料入手ができ、牛札村内でもその成立が珍しい集落であることがわかった（『牛札村誌上』参照）。

第1は中尾村の割山の地が逐次開発されて中尾村の飛び地的な新田村が北国街道開通以前の長沼道添えに成立したものである。時に元禄3年であった。

第2は土着の住民の構成である。上杉・武田の川中島の戦乱で、平出願生寺門徒が山神代にも逃れて來た。また長沼西巣寺門徒も長沼方面から移住して來た。この願生寺・西巣寺は有名な礎石6か寺に属する寺院である。一方、北のモモクネ方面から下りて來たとの伝承を持つ人たち等である。モモクネは「かきね」の意で、旧家所在の中世的な地名である（『信濃國地字略考』栗岩英治著）これは聞き捨てならぬ伝承である。

第3はこの地に土着した大祖先の墓塔はおよそ享保10年前後である。これは元禄3年中尾村から中尾新田村として独立した時代と、偶然に一致する。ところが寺屋敷にあった禪宗系の墓塔については、臨地の住民は無関係であると異口同音に証言している。甚だ理解に苦しむところである。しかし忘れられてしまったのであろう。

最後に宮沢達男家の墓地（図2の④）改修で出土した五輪塔。そして故松岡倉蔵氏が字山道に所有していた畠で採掘した五輪塔（現在高山寺と小林好氏の墓地にあり）などは、門徒宗の人たちが移住して來る以前、この地域に居住した中世人の名残りと、みられることを付加しておく。



寺屋敷の旧地に立つ山崎寿氏

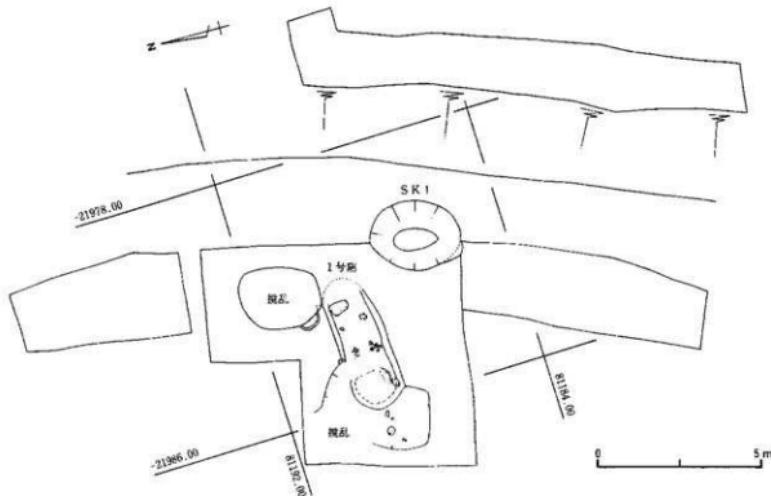
第3章 調査

第1節 調査の概要

家岸遺跡は半礼村大字平出字家岸629に所在する。平出地区の北端で、南急斜面のなかほど、標高600mの位置にある。

調査で検出された遺構は黄白色粘土層を掘り込んだ平安時代の登り窯が1基、土坑が1基である。出土した遺物は須恵器の环、高台付き环、蓋、壺片、盞片、四耳壺片である。時期は高台付き环に深いものと浅いものが混在していること、蓋のつまみに古い形が残っていること、盞に青海波文が多いことなどを考え合わせ、9世紀初頭に位置づけておきたい。

最近の登り窯の調査では、1991年に家岸遺跡の南西の方向上の山遺跡で2基が発見されている。また、西側の前高山の周囲では6基が分布していて1972年に調査されている。東側には番匠北窯址が存在している。このように遺跡周辺には古窯址が4か所で発見されている。今回の調査での検出は、平出地区がかつて平安時代において一大窯業地帯であったことを再認識させるものであった。現在、村では遺跡の詳細分布調査が進行中であるが、この周辺では新たに窯址が発見される可能性が大きいと思われる。操業期間の長さ、今回は検出できなかった窯業に関連した施設、携わった人々の住居などすこしつづ明らかになっていくことを期待したい。



第3図 家岸遺跡遺構全体図

第2節 遺構と遺物

1. 窯 址 (1号窯)

窯体は丘陵の南斜面に築かれ、主軸方向はN-86.5°-Eではば東を向き、等高線に対しては14'傾けて斜めに構築されている。

煙道部分は現道により破壊されている。現存していたのは前庭部から焼成部の途中までで長さ6m、焼成部の床幅は110cmである。前庭部には灰状の炭化物が3cmほど堆積していた。焚口には炭化した燃料材と、構築材として積まれていたと思われる石が残っていた。燃料の木材については残念ながら樹種同定は行っていない。

焼成部の傾斜角は33°、焼成部との変換点の傾斜角は16°とゆるやかになり、また60cmほど奥へ入った所で33°と傾斜がきつくなっている。燃焼部と焼成部の境付近は非常によく焼けていて青灰色になってガチガチと堅くしまっている。その下層は赤い軟らかい焼土である(第6図C-D)。焼成部E-F付近の床面は青く焼けてはいない。赤く砂礫状にさらさらしている。側壁はよく焼けガラス状になっており、残りも良く、分かりやすかった。スサ入りの粘土で造られ側壁には指でナデつけたと思われる跡がはっきりと観察できる。天井部は崩落して残っていない。焼成部の奥の床面には焼けて赤く変色した大きな石(長さ30cm)があった。その場所の側壁は赤く焼けており、急に傾斜角がきつくなっていることから、この辺りから煙り出し部分であり、奥壁にあたり、この石が奥壁部に詰められていたのかもしれない。

出土遺物

壺 (第9図10~19)

10個体が陶化できた。そのほか出土した破片の重量は1,200gである。完型に近い1個体の重量は180~260gである。

10は96年の試掘で出土。口径11cm、器高3.5cmと小型である。天井部は半円型にまるく、外面は1/2が回転ヘラ削りされている。器肉は薄く丁寧に整えられている。そのせいか胎土に含まれる小石が表面に目立つ。つまみは擬宝珠型が付く。

11・12・13は口径が13cmから14cmと比較的小型である。天井部1/2が回転ヘラ削りで整形されているのは11と13で、12は1/3ぐらいいである。11は口縁と天井部の塊が強いナデのせいか沈みこんでいるような形になっている。他と比べて胎土は粗くざらざらしている。13の器高は2.8cmと低い。またつまみの接合部に糸切り痕が見える。14~19の口径は16cm台、器高は3cm台である。14の天井中央部分の器肉は厚い。また回転ヘラ削りの速度の変化によりついてしまったと考えられる工具痕が残る。15の天井部は丸い。

陶化できた10点のうち、歪みのあるものは12、亀裂のあるものは18であり、みんな比較的良品である。

つまみについては、ほとんどが中央部分に微かな突起を持つ擬宝珠型であるが、平らなのが12、くぼんでいるのが15である。色調については、赤色がほとんどなのに対し、灰色は15と19である。

全体の出土量からして壺は少ない。

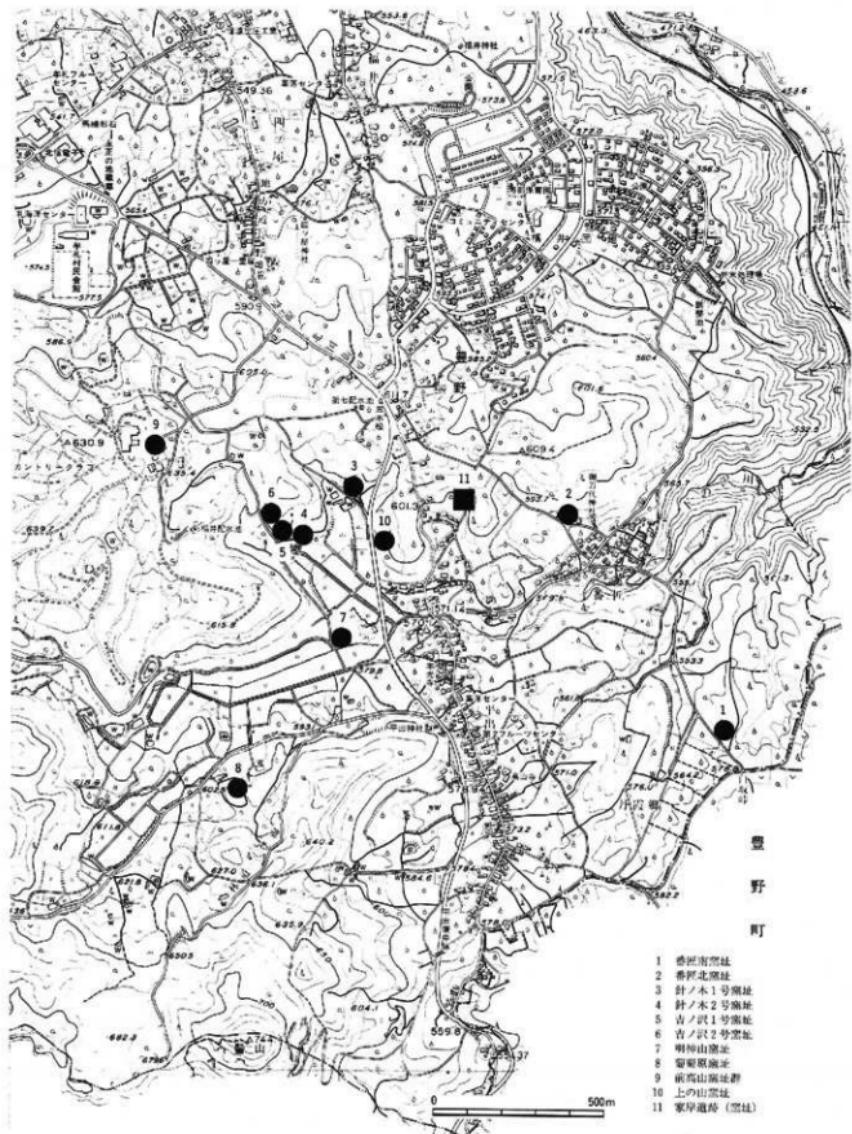
环 (第9・10図20~56)

环は図示できたものは37個体である。歪みが大きかったり、他のものと連着していたりで図示しなかったものと小破片の重量の合計は6,040gであった。図示した完型個体13点の重量は150~155gが7点、160~167gが5点、175gが1点、平均重量は157gであった。

法量をみていくと口径は最も小さいもので11.4cm(47)、最も大きいもので13.9cm(52)、あとは12cm台で



第4図 家岸遺跡地形図



第5図 家岸遺跡周辺の古窓址分布図

E-F

- 赤褐色土縫かい 地下ブロック含む
- 赤褐色土粗い 黄褐色地土 ブロック含む
- 暗赤褐色 地土ブロック含む
- 赤褐色 地土ブロックが剥けた状態
- 暗褐色地土
- 暗褐色 地上
- 暗褐色地土 ポロボロ
- 暗褐色地土 ポロボロ
- 暗灰色 ガラス質の剥けたもの
- 窓体片 下面がガラス質
- 黄褐色地土 2より細かい
- 赤色地土
- 暗黃褐色

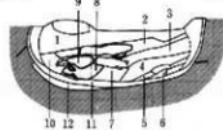
C-D

- 暗褐色
- 黄色地土 黑褐色地土混
- 暗褐色 腐化物質 窓体がブロック状
- 窓体 ガラス質
- 黒褐色 腐化物多量
- 白色地 ポロボロ ガラス質
- 青灰色 壊れ
- 赤色 地土 細かい

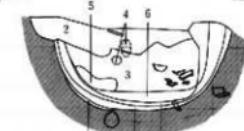
A-B

- 糞化物
- 灰色地土
- 赤色地土
- 黄褐色地土 枯

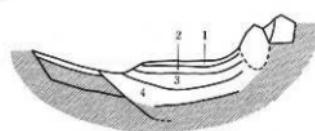
E 600.53m



C 600.18m

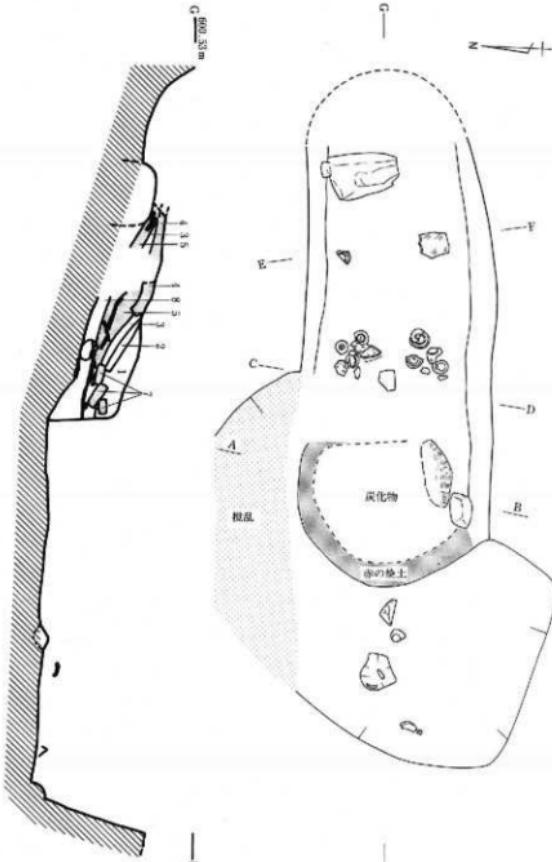


A 599.95m



G

600.09m



G-H

- 赤褐色 腐化物 窓体片 黄褐色地土混
- 赤褐色 窓体のブロック状 腐化物多量
- 黄褐色 サラナラの地上
- 窓体 赤色ブロック状
- 窓体片 暗褐色ガラス質と赤色のブロック状腐化物
- 窓体片 赤色の粒状に剥けている
- 窓体片 大 ブロック
- 窓体片 大粒に剥けている 稼赤黄色

第6図 1号窓実測図 (1/40)

ある。その突出している47、52は歪みが大きいことを考慮にいれると、ほぼ口径は一定といえる。

底径は5.5~6.7cmの範囲に入るが、特に小さいものは4.9cm(53)、大きいものは7cm(41)となっている。

器高は浅いものは3.1cm(34)から深いものは4.4(46)まで平均に広がっている。

このように実際に目で見ても特別に大きさが違って見えるものではなく、数字的にも規格化している。

器形を観察する。

体部は立ち上がり部分から口縁部まで一気に外反しているものが多い中で、膨らみを持ち内湾ぎみのもの(20・21・32・33・35・37・44・46・49・50・51・55)。

口縁端部が強くナデられて内面にロクロ痕が目立ち、端部は覗く整えられている(23・51)。22の口縁端部もとがっている。21の体部立ち上がり部分は押さえが足りなかつたらしく底部との境が明瞭でない。50は前庭部からの出土で、焼きが古く軟質須恵器のようである。

底部はすべて糸切りである。色調は床面出土の36・37のみ灰色で、ほかは赤色系である。底部に焼け歪みが多い。器面に気泡が膨らんだようなツブツブが多く出ている。

高台付き坏(第11・12図57~74)

出土した破片の重量は2,500gである。完型に近い1個体の重量は200~300gである。

図示できた高台付き坏はおおよそ以下の3形態に分類できる。

① 口径・底径・器高それぞれが小さく小型のもの(57~60)

口径は10cm前後、器高は6~7cmである。いずれも歪みは少ない。57と59は底部に整形時に付いたと考えられる爪形圧痕がみられる。また気泡の膨らんだ部分がある。暗茶褐色のものが57と59で、58と60が灰色である。58の底部には糸切り痕が残り、付け高台であるが、中央よりずれて付けられている。機械的作業を思わせる。60は口縁部のみの残存であり、ほかのものより幾分大きめであり器肉は薄い。

② 器高の大きな(深い)もの(第11図61・62)

つぶれていたり、歪みがひどかったりで図示できなかったが、窓体床面から灰をかぶった七器が多く出土した。歪みが大きはあるが2点のみ図示した。底部いっぱいに大きめの高台が付けられ、体部はすぐ立ち上がって外側に開いている。いずれも灰をかぶりまた歪みが大きく良い仕上がりとはいえない。

③ 口径と底径が大きく、器高の小さい(浅い)もの(第11・12図63~74)

器高は4cm前後と一様である。口径は、個体が歪んでいることや、欠損部分が多いことなどを考慮に入れても14.5cm前後のものが多い。大きいものは16cm前後ある。そんな中で69は口径が9cmと特に小さい。

器形を観察すると体部が内湾するのが63・66・73である。63・66は底部から継をつくって立ち上がり口縁端部を内湾させている。66は大きめの高台が付けられ、体部の立ち上がり部分は角張っており、口縁端部で内湾させている。

底部が厚く、重いと感じさせるのが64・67・72である。それぞれ丁寧な作りであるが、特に64は良品である。

口径が大きい68・71・74はひどく歪んでいる。体部は外側に開いている。

ほかと異なる様相をもつのが74で、体部の器肉は薄く、意識的につけたと考えられるロクロ痕が明瞭である。また高台も他が外側へ開いているのに対し、垂直ぎみである。

底部の整形については、中央部分に糸切り痕を残すのがほとんどである。回転ヘラ削りによるものは68・74である。

特筆すべきは、底部に爪痕と思われる痕跡がある土器(63・64・67・71・72・73)が出土していることで

あり、後述する。

色調については赤色が多く、灰色のものは65・66・69・70の4点である。

凸帯付四耳壺（第8図1・3）

1は焼成部床面から出土しており灰黄色の灰がこびりついている。1/5の破片である。最大径は胴部上部にあり28.2cmを計る。凸帯の断面はくぼみを持ちはば台形である。ほかに別の2個体の破片が出土している。これについてはタタキ目と当て具痕の折影を示してある（第14図）。3は灰黒色である。頸部の径14cm。黒褐色。内面に灰黄色の灰がこびりついている。器肉は薄い。内面には同心円の当て具痕が見える（第14図の1と同・個体か）。

短頸壺（第8図2）

肩部のみの破片である。胴部最大径は14.8と推定される。外表面は灰黄色の灰がこびりついていてわからぬが内面は丁寧にナデ調整がなされている。検出面の出土である。

壺（第8図5～9）

5、6は小破片で断面のみ示した。凸部分が強調されている。7は口径40.6cm、8は口径50cm、9は口径57.2cmを計る。いずれも尖削できる範囲の小破片である。7と9は床面近くの下層から出土しており灰黄色の灰がこびりついている。手描きの1条の波状文が施されている。8は上層の現代の物も混入された層から出土している。7、9はこげ茶色、8は灰色である。7の口縁部には2本の沈線を巡らしてある。

ほかの図示できなかった破片は20,390枚あった。平底の底部も出土している。

2.1号土坑（SK1）

現農道整造時に削平されたらしく上層では1/2のみの検出であった。窓の上方であり、南東の1mのところに当たる。長径2.7m、短径2.1m、深さ80cmの円形を呈する。覆土は5層に分けられるが全体に焼土が含まれている。

出土遺物（第13図）

図示できたものは、灰・蓋・高台付き壺・壺の6点である。細片で図示できないものには、土師質のような軟質須恵器（西浦跡地出土したような土器）、壺片、窓壁片などがある。

壺（75）

口径16.8cm、器高2.9cm。天井部の1/3がヘラ削りされている。器肉は薄い。つまみの中央部には微かな突起があり灰色を呈する。胎土は窓体内出土のほかのものより粗い。内面には溶滲のようなものが付着している。

壺（78・79）

78は1/3の残存であり、口径13.4cm、底径6.7cm、器高3.8cmである。底部は厚めであり、体部は外へのびやかに開いている。灰色を呈する。79は口径13.6cm、底径6.7cm、器高3.8cmで大きめである。酸化炎焼成の軟質須恵器である。色も明橙色でかわらけのようである。破片も割れるというのではなく剥離しているという状態である。ひどく磨耗している。体部の立ち上がり部分は明瞭な稜線を残し大きく外へ開いている。

高台付き壺（76・77）

76は口径14.5cm、底径9.6cm、器高7.6cmの深い型である。直ざみの大きい高台が付けられている。高台にはくぼみはなく平で全体で接地している。体部の立ち上がり部分は角張り、外に開きざみにそのまま一気に口縁端部まで伸びている。1/4が欠損しているが整った個体である。底部は糸切りの後の調整であるヘラ状工具のナデ痕が見える。また、爪形压痕が残っている。

77は底部のみである。底径10.2cm。高台は外へ大きく開き、内側で接地している。76と同様にヘラ状工具によるナデ痕が見え、爪形圧痕が残る。

壺(80)

底径は8.2cmある。底部から腹部下部までの破片である。外側に自然釉がかかり、溶津が付着している。

参考文献

小柳義男 1992 「平出遺跡群発掘調査報告書」牛札村教育委員会

小柳義男 1997 「牛札村誌 上 自然 原始 古代 中世 近世」村誌・学校誌編纂委員会

養沢 浩 1976 「上水内郡誌歴史編」上水内郡誌編集会

養沢 浩 1986 「凸帶付四耳壺考」長野県考古学会誌51

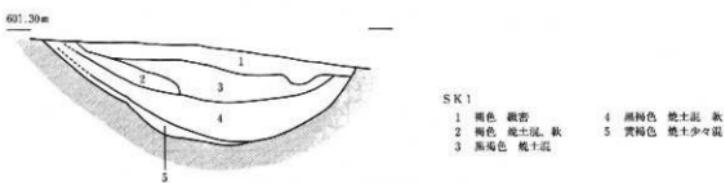
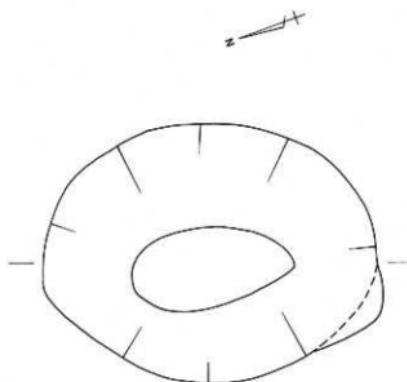
田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店

長野県史考古資料編 1981 長野県史刊行会

原 明芳はか 1989 「吉田川西遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3

埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997 「清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯跡」御長野県埋蔵文化財センター

前田遺跡 1981 「長野県牛札村緊急発掘調査報告書」牛札村教育委員会



第7図 SK 1実測図 (1:40)

第3節 底部に爪形圧痕をもつ須恵器

1. 家岸窯出土の爪形圧痕をもつ須恵器

家岸窯址からは壺、高台壺、蓋、甕等の須恵器が出土している。爪形圧痕がみられるのは高台壺に限られる。

高台壺は口径・器高によって深碗の大・小、碗の大・中・小に分類されており、それぞれの個体のうち爪形圧痕をもつ点数は次のような（底部が確認できる資料中の点数）。

深碗大で6点中1点、深碗小で3点全部、碗大で7点中4点、碗中で12点中6点、碗小で5点中1点となる。個体数が少ないのではっきりしたことは言えないが、器種毎の割合は20%前後から50%近くにも及ぶ。また、全体的な傾向としては大きめの器種につく割合が多いようである。

2. 「爪形圧痕」の類例と研究

爪形圧痕がはじめて注目されたのは、兵庫県志方町（現三田市）西ノ池古窯址の報告である⁽¹⁾。報告では壺Bの底部高台内側に残る「爪形状圧痕」を取り上げ、「この圧痕は形状より見て製作時において何らかの形で残されたものと思われ、環部の約半数についており、蓋Aの一部や高台をもつ壺にも同様の圧痕を持つものがある」と述べている。また、兵庫県内の福布ケ森西遺跡、志方町大塚古墳、三田市青野ダムサイト窯址の類例を紹介し、当時は出土が兵庫県下に限定されていたことから「地域的特色のメルクマールともなり得る」のではないかと述べている。

次いで、岐阜県岐阜市老洞古窯跡群の報告⁽²⁾では「右台壺身の高台貼付と関連した技法」として「爪状圧痕」に注目している。そこでは、「断続的に1周するもの、一つ一つが連続的に1周するものなどがあり、様々であるが、前者が圧倒的に多い」、「極めて深く明瞭な形で存在するもの、わずかな痕跡程度に見られるものがある」、「圧痕の順位を見ると、底部を逆にして上から見た場合、それは逆時計方向についていったものであることが知られ、しかもそれは、最終段階についたものであると思われる」と圧痕を観察している⁽³⁾。

そして圧痕のついた時期については、「つまり、高台を貼付する際、底部をヨコナデ調整するが、この爪状圧痕はその後についたものであり、從って高台貼付と関連した技法に付随したものと考えたが、実際は、貼付する時ではなくそれ以後の技法の段階に対応するものである」「ただそれは、高台を底部に貼付する段階のものとは考えられず、最後の調整段階についたものと想定され、全てのものに見られるのではないことを考えると、何か偶然についたものとも思われる」と述べている。また、兵庫県西ノ池古窯跡群（8世紀前半）、愛知県鳴海32号窯（8世紀後半）、愛知県猿岡4号窯（11世紀前葉）、愛知県広久手F号窯（11世紀中葉）、岐阜県北丘古窯跡群（11世紀）の事例をあげ「かなり普遍的に認められるものであること」としている。

窯跡の年代は、1・2号窯跡で時期差があるが（1号窯跡8世紀第1四半期の後半、2号窯跡8世紀代2四半期）8世紀前半ととらえておく。「爪形状圧痕」がどちらから、どのような割合で出土しているのか報告書からは判断しがたい。

岐阜県恵那市正家1号窯の報告⁽⁴⁾は「爪形状圧痕」を「爪先によって施されたと考えられる」とし、いろいろなタイプの圧痕を①大きく円形に巡るもの、②中心部に小さく円形に巡るもの、③らせん状に巡るもの、④曲線の端に放射線状に巡るもの、⑤鋸歯状で円形に巡るもの、⑥鋸歯状に二重に巡るもの6タイプに分類した。

そして、⑥の存在や、高台周囲に整然とした円形に巡るもののがほとんどみられないことから、「ただ単に高

台貼付け時に（無意識的に）残されたものとは考えられないが、その性格・意味については現段階では不明である」と記述している。

さらに底部整形技法を器種毎に表にまとめているので爪形圧痕の割合もつかむことができる。表から「爪形」圧痕の数を調べると楕で1,643点中55点、深楕で530点中3点、皿で1,133点中191（段皿449点中なし）、折縁皿で65点中4点となる。楕で3.3%、深楕で0.6%、皿では16.9%と器種によって大きな違いが見られる。窯跡の時代については虎渓山1号窯式期（11世紀前半）に位置づけられている。

岐阜県多治見市北丘26号窯の報告^⑨は、「高台は、回転削り整形直後に粘土紐を環状に貼付し、糊し皮などをあて、機械の回転によって整形した付高台であり、整形の際に中指または薬指の爪先が触れたと思われる爪形圧痕を残す物がある」と記述している。出土遺物の觀察表に記録された爪形圧痕の数は、楕I（大楕）で79個体中7個体、楕II（楕）で73個体中6個体、楕III（小楕）で11個体中1個体、皿で77個体中3個体、段皿で87個体中27個体となっている。

やはり器種による差が大きく、楕で約10%、段皿では30%ほどに爪形圧痕が残っていることになる。窯跡の時代については虎渓山1号窯式期（11世紀前半）に位置づけられている。

福井県吉崎村船場窯跡から多くの爪形圧痕が出土している^⑩。その割合は短頭壺が12点のうち1点、壺B Iが176点のうち29点、壺B IIが65点のうち9点、皿B IIが69点のうち10点、皿B IIIが18点のうち1点、楕B IIが4点のうち2点となっている。壺B I・II、皿B IIで15%前後の爪形圧痕が残っていることになる。窯跡の年代については「8世紀代の様相が残る一方、新しい様式の採用」がみられ9世紀初頃と考えられている。

同報告書では「爪状圧痕」の項をもうけている。そこでは圧痕を①有台の壺、皿の底部外面、高台の内側にみられるものであるが、一部長頸壺の底部にもある。②すべてのものにあるわけではなく一部のものにみられる。③断続的に1周するもの、1つ1つが連続的に1周するものなどがあるが、高台に沿って1周するのではなく渦巻き状になっている。④詳しくみると、弓状に外側に沿っているものもあるが直線的なものもあり、しかも圧迫痕ではなく横に動いた痕跡がみられた。これは爪の圧迫痕ではなく、何らかの工具が横向に動いた跡ではないかとも思われると観察している。

そして、「高台の口径や傾き、高さなど検討したがはっきりした傾向はみられず、どういう条件のもとにつくかは不明である」と記述している。

このほか、愛知県名古屋市N N288号窯（荒池1号窯）から、回転ヘラ削りされた底部に爪形圧痕をもつ壺Bが1点出土している^⑪。窯跡の時期は8世紀前葉と考えられている。兵庫県戸井町坪1号窯（9世紀前半）からも爪形圧痕をもつ壺Bが1点出土している^⑫。

3. 爪形圧痕はどのような過程でつくのか

爪形圧痕がどのような過程でついたのか検討したい。まず、これまでの研究からわかったことをまとめてみると以下のようなになろうか。

ア、8世紀前半までさかのばり、11世紀前半まで確認できること。

イ、兵庫県・愛知県・岐阜県・福井県・長野県（家岸窯）で確認されていること^⑬。

ウ、高台のつく器種から確認されること。

エ、圧痕にはいくつかのタイプがみられること（正家1号窯側に詳しい）。

オ、圧痕はクロ回転と同じ方向に連続するらしいこと（老洞古窯跡群）。

カ、高台を貼付と関係してついたと考えられているが（どういう条件でつくかは不明）、最後の調整段階でつ

いたとの考え方もあること（老洞古窯跡群）。

キ、「爪形圧痕」は「爪先」でつけられたとする一方、「なんらかの工具」によってつけられたという考え方もあること（正家1号窯）。

さて、以上をふまえて家岸遺跡の圧痕を観察してみよう。まず、器種は先に述べたように高台のつく壺に限られる。また圧痕は第11～13図にみると、これまでに指摘されたのと同様な「爪形圧痕」であることがわかる。さらに、①中心部付近と高台に沿って（二重に）連続するものが多い（高台部に添うものは、高台を取り付けた後の調整ナデによって不明瞭になっているものが多く観察に注意を要する）。②中心に近い圧痕は間隔が狭く連続するようになる（高台に添うものは間隔があく）。③圧痕の弧は例外なく外を向く。④圧痕は底部を逆にして上から見た場合右回りに連続（ロクロは左回転）することがわかる。

この圧痕がいつどのようにしてついたかが問題になる。

底部に高台を取り付けるときは、作業に耐え得るまでに乾いた壺を裏返して底部周辺部を削り（いくぶんやわらかな器面がてて高台を付着しやすくなるだろう）、紐状にした高台部を底部に付着させることになる（乾燥の度合いの異なるものを付着させるのであるから、「どべ」とよぶ泥を壺の底部につけることがあったかもしれない）。

それから、親指と人差し指で（親指を外側、人差し指を内側に）紐を押さえつけるようにしながら、付着させていく⁽¹⁰⁾。このとき、爪が長かったり、強く押しつけると人差し指の爪が高台沿いに連続していくことになる。この作業は2本の指で続けると自身が壺のまわりをまわることになってしまう。そこで、中指を壺の中央近くに置き（バランスを取るにも役立つ）、（自分の位置は変えずに）高台を押しつけた後、指で高台をはさんだまま壺を右に少しずらす。次に中指を少し左に移動する。親指と人差し指もそれにつれて左に移動させながら高台をはさんで底部に付着させていく。という動作を繰り返すことになる。このようにして全体に紐を付着させると、中心付近に右回りの中指の爪形がつき、高台部に沿って人差し指の爪形が右回りにつくという結果になる。なお、高台付近の爪形は高台部の調整ナデによって消えてしまったり、不明瞭になってしまることが多い。

以上は陶芸家の朝北奈克文氏と検討し確認した例である。すべての「爪形圧痕」が同様にしてついたのか他の例を実際に見てないので判断できないが、少なくとも家岸窯の事例はこれで解決できたのではないかと考えている。

4.まとめ

「爪形圧痕」から何がわかるかという点を考えてみよう。1つは、須恵器の大量生産にともなって、裏の整形（みばえ）はしだいに重視されなくなってきたことが確かめられるだろう。また（爪形圧痕が何人によってつけられたのかという点が問題として残るが）、爪形圧痕のつく割合から何人の者が製作に従事したか検討できるのではなかろうか。あるいは、器種ごとに爪形圧痕の割合が大きく異なる事例のあることから、特定の製作者がときには特定の器種を分担することがあったのではないかといったことも考えられるようになってくるのではないか。

爪形圧痕は注意してみると案外多く確認できるものかもしれない。しかし、すぐ近くの上の山古窯からは1点も確認できなかったように、どこにあるというものではない。その点『西ノ池古窯跡群』で指摘されたように「メルクマール」としての利用は可能ともいえる（小柳義男）。

註・参考文献

- 1 藤井祐介・高島信之・丹治康明ほか 1979 「西ノ池1号窯・2号窯発掘調査報告」「西ノ池古窯跡群調査報告書」P39ほか 西ノ池古窯跡群調査団
なお、同書は高島信之氏のご好意により入手できた。記して感謝したい。
- 2 萩野繁春 1981 「环身・蓋製作上の2・3の問題点について」「老洞古窯跡群発掘調査報告書」P47 50 岐阜市教委
- 3 老洞古窯ではロクロの回転方向が、环身類が左回転、大型器種では右回転を示している。环身類の爪形圧痕もロクロの回転方向と同じ方向に連続する。
- 4 古藤孝正 1983 「灰釉陶器」「正家1号窯発掘調査報告書」P19ほか 恵那市教委
- 5 若尾正成 1984 「北丘26号窯出土遺物」「北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書」P25ほか 多治見市教委
- 6 本多造成 1995 「爪状圧痕」「船場窯跡」P51・52 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 7 尾野喜裕 1994 「N N288号窯出土遺物」「名古屋市天白区・緑区鳴海地区須恵器窯跡調査報告書」P31 名古屋市教育委員会
- 8 渡辺昇 1990 「戸井町坪1号窯」P66 兵庫県文化財調査報告 第74号
脱稿後、中野市清水山一号窯跡灰原出土品（第172図77）及び二号窯出土品（第159図59）にも高台の内側に爪形圧痕がある环のあることを確認した。
長野県教育委員会ほか 1997 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13」
なお、また星代遺跡群S B2017の住居址から出土した黒色土器の高台の内側（第138図17）に爪形圧痕を確認した。
爪形圧痕が須恵器や灰釉陶器にのみみられるものでないことが明らかになるとともに、製作技術が類似していたことがわかる。
長野県教育委員会ほか 1998 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3」
同資料については、県立歴史館柳原袈裟利氏のご教示による。
- 9 このほか老洞古窯跡の報告には「京都府下の古窯跡群においても確認されているようである」と記されている。
- 10 小林村古町の陶芸家朝比奈克文氏のご教示によれば、こうした作業は右利きの人なら左手ですることが多いようである。

出土土器観察表

蓋

図版No	口径	器高	残存率	色	備考
10	11.0	3.5	3/4欠損	こげ茶	ていねい
11	13.1	3.1	欠損ナシ	こげ茶	ベルト長軸2層より上の土器 器面ツツツツ
12	14.2	3.0	欠損ナシ	内面 外面 暗 橙	窓体内 ゆがんでいる
13	14.4	2.8	わずか欠損	明 橙、暗 橙	窓体内 ていねい
14	15.9	3.7	口縁部1/2欠損	内面 外面 明 橙	
15	16.1	3.7	1/2欠損	灰 色	窓体内
16	16.1	3.5	1/3欠損	内面 外面 暗 橙	ゆがみあり
17	16.2	3.5	わずか欠損	内面と縁部こげ茶 明 橙	窓体内 ていねい
18	16.6	3.3	1/3欠損	明 橙	窓体内 埋土中 ゆがみあり 龜裂あり
19	16.7	3.6	1/2欠損	灰黒色	
75	16.8	2.9	1/3欠損	灰 色	S K 1 内面溝津付着

(埋土中とは擾乱層の土をいう)

杯(1)

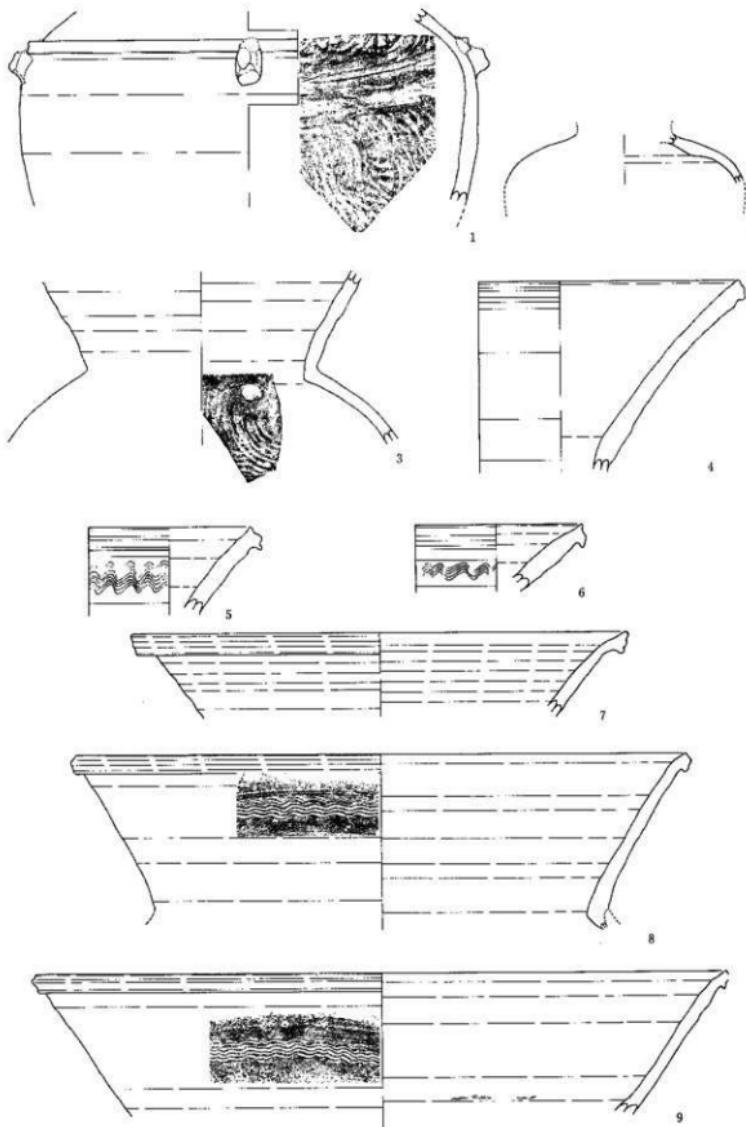
図版No	口径	底径	器高	残存率	色	備考
20	12.1	5.8	3.3	1/2	暗褐色	窓体内
21	12.3	6.0	3.8	7/8	暗褐色 (こげ茶)	欠損部分口縁部 窓体内
22	12.0	6.0	3.5	3/4	明 橙、こげ茶	窓体内
23	12.6	6.3	3.6	3/4	こげ茶	窓体内
24	12.4	6.5	3.7	欠損ナシ	こげ茶	窓体内
25	12.5	6.2	4.1	1/2	こげ茶	窓体内
26	13.0	6.2	4.0	欠損少々	こげ茶	窓体内
27	12.8	6.7	4.1	4/5	こげ茶	窓体内
28	12.9	5.9	4.0	ほぼ完形	こげ茶、底部明茶	窓体内
29	12.7	5.6	3.7	完 形	こげ茶	窓体内
30	12.1	6.2	3.3	欠損部わずか	こげ茶	窓体内
31	12.4	6.1	4.2	口縁部1/6欠損	明 橙、こげ茶	窓体内床近く
32	12.9	5.5	3.9	2/3	明 橙、灰色 (部分的に口縁)	窓体内床近く ベルト長軸の2層より下の土器
33	13.0	6.4	3.8	3/4	明 橙	試掘 窓体部
34	12.6	6.2	3.1	欠損ナシ	暗 橙	試掘 天井部直上 窓体内
35	12.8	6.2	4.0	完 形	1/2ずつ明・暗 橙	窓体内
36	12.9	6.3	3.7	3/4	灰 色	床面
37	13.0	6.1	4.3	1/4	灰 色	床面
38	12.4	6.2	3.9	2/3	内面 外面 明・白・橙 明・白・橙 とこげ茶	試掘 天井部直上
39	17.3	6.4	3.8	ほぼ完形	内面 外面 明・白・橙 明・白・橙	口縁部少々欠損 ベルト長軸2層より上の土器
40	12.2	6.2	3.7	欠損ナシ	こげ茶	検出面 窓体近く
41	12.9	7.0	4.2	2/3	こげ茶	
42	13.4	5.0	3.5	2/3	明 橙	試掘
43	12.7	5.6	4.1	2/3	明 橙	試掘 埋土中

杯(2)

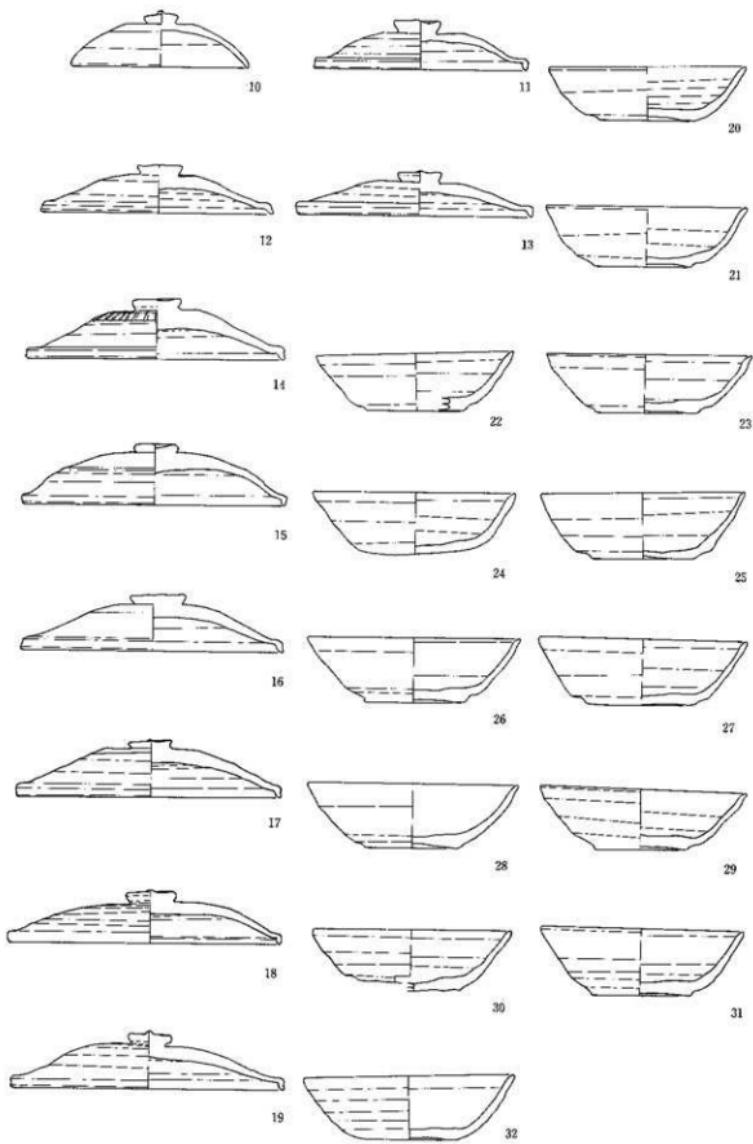
団版No	口径	底径	器高	残存率	色	備考
44	12.6	5.6	3.7		明橙、こげ茶	試掘
45	12.8	6.9	3.7	3/4	明 橙	試掘
46	11.7	5.6	4.4	1/2弱	明橙、こげ茶	試掘
47	11.4	6.1	4.1	口縁部11/12欠損	こげ茶	試掘
48	12.5	5.6	3.7	1/2	明 橙	埋土中
49	11.9	6.0	4.0	口縁部3/4欠損	内面 灰色と暗橙 外面 こげ茶	
50	13.3	6.1	3.8	1/4	灰色 黄白色	p i t
51	12.6	5.8	4.1	完 形	明こげ茶	
52	13.9	6.1	3.6	口縁部3/4欠損	内 こげ茶 外 灰色、こげ茶	窯体内
53	13.2	4.9	3.5	体部2/3欠損	こげ茶	窯体内
54	12.7	6.8	3.6	1/3	灰色と明茶	窯体内
55	12.6	6.1	4.0	1/4	明 橙 口縁部灰色	埋土中 床面
56	12.4	6.4	4.0	底部1/2 口縁1/4	明 橙	試掘
78	13.4	6.7	3.8		灰 色	SK 1
79	13.6	6.7	3.8	2/3	明 橙	SK 1 SK 1

高台付环

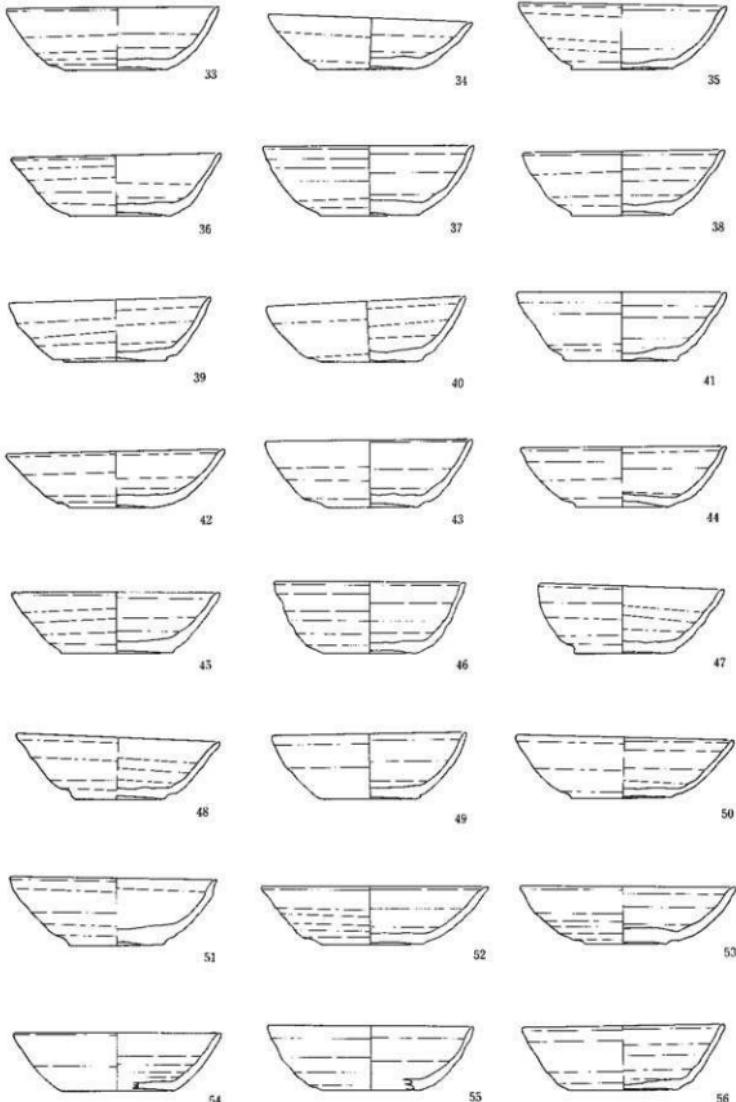
団版No	口径	底径	器高	残存率	色	備考
57	9.5	6.3	4.2	わずか欠損	こげ茶	窯体内 底部にツメあと、ブクブクあり
58	10.0	6.0	4.4	2/3欠損	灰 色	底部にツメあとあり 窯体内 ていねい 系切→回転ナデ
59	10.1	7.0	4.8	1/6欠損	明こげ茶	窯体内 底部にツメあと、ブクブクあり
60	10.6			口縁のみ1/2弱	灰黑色	黒色上中 ていねい
61	14.2	9.0	6.7	体部2/3欠損 底部1/2欠損	こげ茶+黒	窯体内 黄白色の灰がついている
62	14.8	8.8	7.0	1/3欠損	黒褐色 明こげ茶	窯体内床近く ゆがみあり
63	14.5	9.5	3.8	1/2欠損	明 橙	ゆがみあり 底部にツメあとあり
64	14.4	9.8	3.9	口縁部わずか欠損	底部、内面 明橙 外 面 こげ茶	窯体内
65	14.6	10.7	3.4	1/3欠損	灰黑色	ブクブクあり 窯体内 系切→回転ナデ? ケズリ?
66	14.9	10.8	3.8	1/4	灰 色	ていねい
67	14.7	10.1	4.0	1/2欠損	明 橙	ベルト長軸2層より上の土器 底部にツメあとあり
68	15.4	11.0	4.3	1/2欠損	明 橙	窯体内 口縁部ゆがみ大きい
69	9.0	9.3	4.1	3/4欠損	灰 色	
70	15.5	11.2	4.0	1/2欠損	灰黑色	底部にツメあとあり
71	16.1	10.5	4.2	わずか欠損	明こげ茶	ゆがみ大きい 底部にツメあとあり
72	15.8	10.3	3.9	2/3欠損	明 橙	底部にツメあとあり
73	15.6	10.4	4.0	1/2欠損	明 橙	ひすみあり 底部にツメあとあり
74	16.1	10.4	3.7	1/3欠損	明 橙	窯体内 ゆがんでいる
75						
76	14.5	9.6	7.6	1/3欠損	灰 色	SK 1 底部にツメあとあり



第8図 1号窯出土遺物実測図 (1~6 1:3、7~9 1:4)



第9図 1号窯出土遺物実測図 (1 : 3)



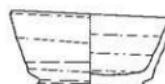
第10図 1号窯出土遺物実測図 (1 : 3)



57



58



59



60



61



62



63



64



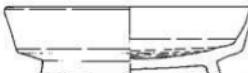
65



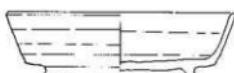
66



67



68



69



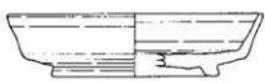
第11図 1号窯出土遺物実測図 (1 : 3)



70



71



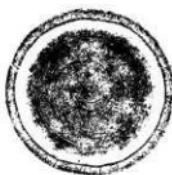
72



74



73



78

第12図 1号窯出土遺物実測図（1：3）



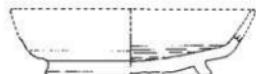
75



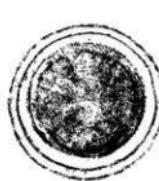
76



79

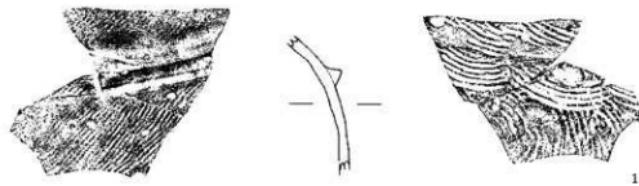


77

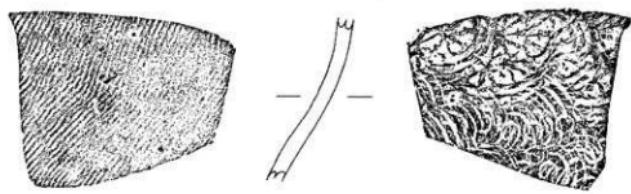


80

第13図 SK 1出土遺物実測図（1：3）



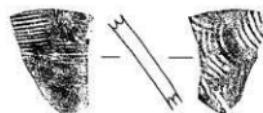
1



2



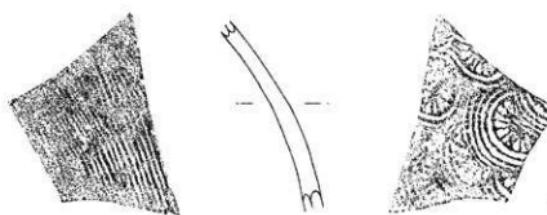
3



4

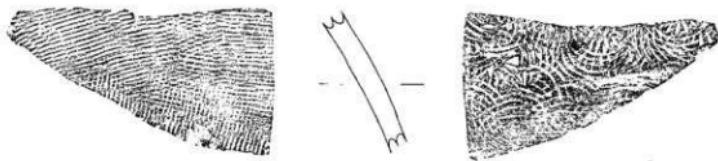


5

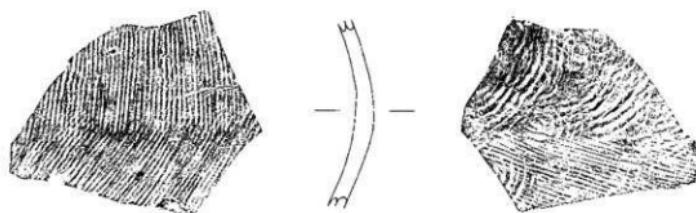


6

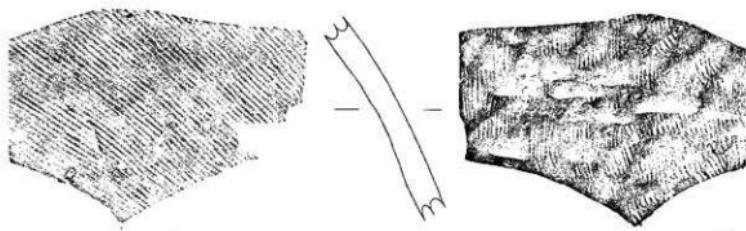
第14図 タタキ目と当て具痕拓影図 (1 : 3)



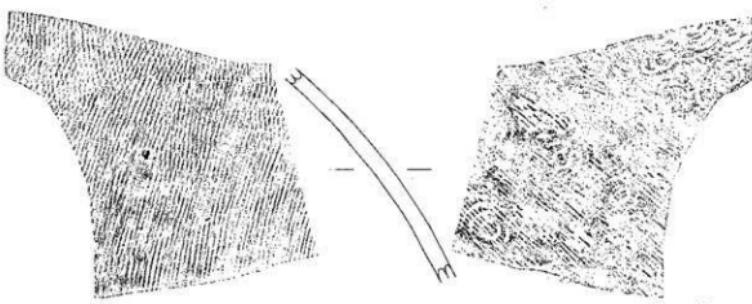
7



8



9



10

第15図 タタキ目と当て具痕拓影図 (1 : 3)

写 真 図 版

図版 I

北西より遠景



北側より遠景



南西より遠景



図版 2



調査風景



前庭部遺物出土状況



燃焼部断面

図版 3

窯体内底部遺物出土状況



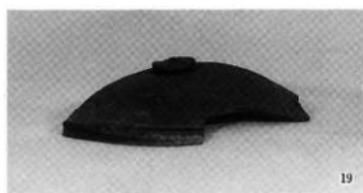
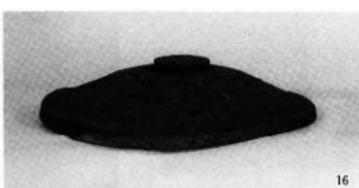
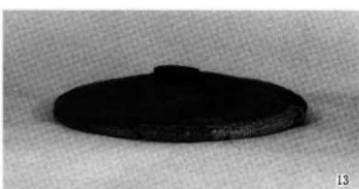
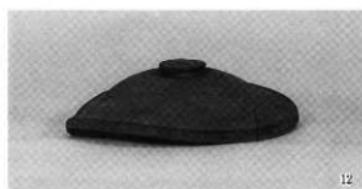
北側窯壁の指ナ子痕



SK1



図版 4



1号窯出土土器（蓋）



20



21



22



23



24



25



26



27



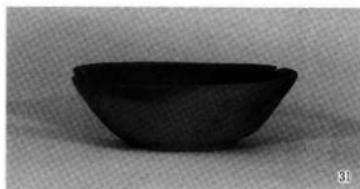
28



29

1号窯出土土器（坏）(1)

図版 6



1号窑出土土器(环)(2)

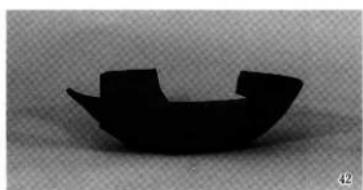
図版 7



40



41



42



43



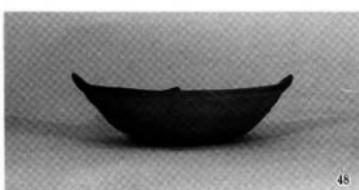
44



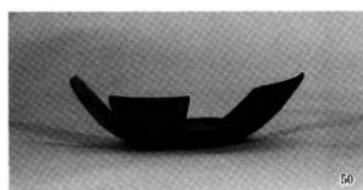
45



46



48



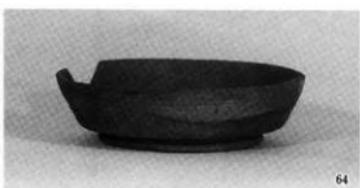
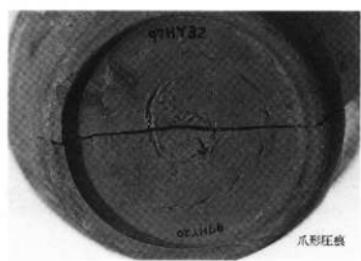
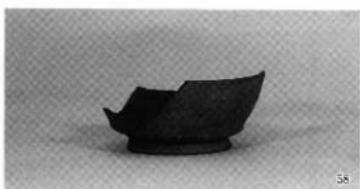
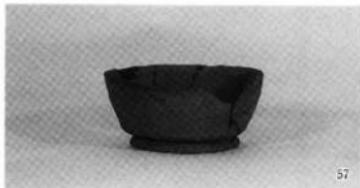
50



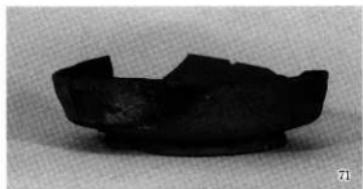
51

1号窯出土土器 (壺) (3)

図版 8



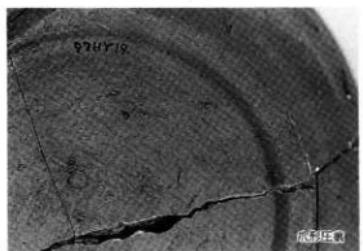
1号窯出土土器（高台付環）(I)



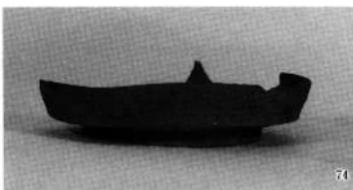
71



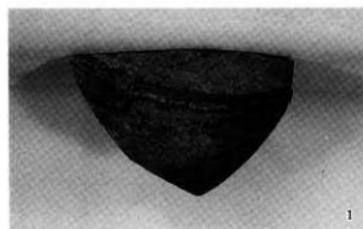
73



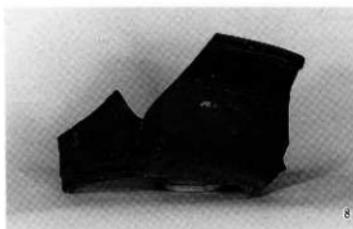
1号窯出土土器（高台付環）(2)



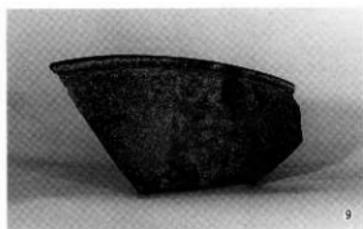
74



1



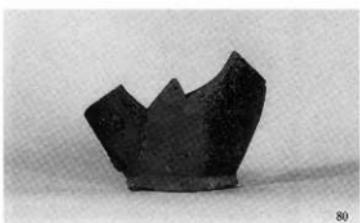
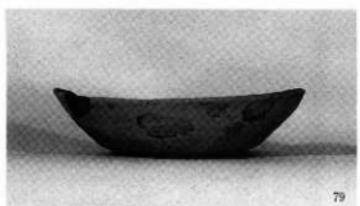
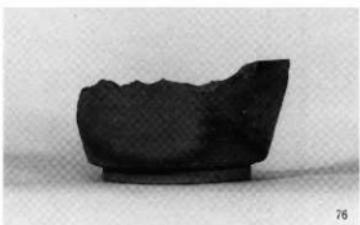
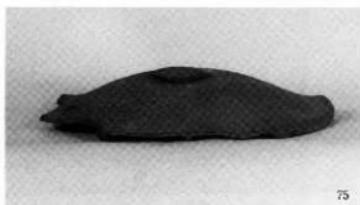
8



9

1号窯出土土器

図版10



S K 1 出土土器



癒着した土器

報告書抄録

ふりがな	やぎし いせき						
書名	家岸遺跡						
副書名	農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —古窯址調査—						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	横山かよ子						
編集機関	牟礼村教育委員会						
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡牟礼村大字牟礼2795-1 TEL (026) 253-2511						
発行年月日	1998年3月31日						
印刷製本	ほおずき書籍株式会社						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°		m ²	
やぎし いせき 家岸遺跡	長野県上水内 郡牟礼村大字 平出	205842	36° 43° 54"	138' 15' 14"	1997.6.25 1997.7.18	200m ²	農道建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
やぎし いせき 家岸遺跡	古窯址	平安時代	窯址 1 土壤 1	須恵器			

家 岸 遺 跡

農村総合整備モデル事業農道65号線建設
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
— 古窯址 調査 —

発行日 平成10年3月31日
編集発行 半札村教育委員会
印刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
